

【書評】

李乃琦著

『一切経音義古写本の研究』

北海道大学名誉教授・国語学 池田証寿

ここに紹介する『一切経音義古写本の研究』は玄応撰一切経音義二十五巻を対象とする。一切経音義の研究書としては日本国内ではじめての刊行となる。本書の意義は、一切経音義古写本の諸本の系統を明らかにし、日本古辞書に利用された一切経音義の系統を明らかにしたことである。国内外に所蔵の一切経音義古写本の全文をデータベース化して結論を導いており、実証的な研究でありながら情報学の方法を駆使した成果となった。

一切経音義古写本としては、宮内庁書陵部蔵の大治本が広く利用されてきた。大治本は法隆寺一切経として、大治三年（一一二八）に書写されたもので、現存する五帖十九巻が山田孝雄編により昭和七年（一九三二）に複製刊行された。昭和五十五年（一九八〇）から翌年には古辞書音義集成第七巻（九巻）として新しい影印が刊行された。これには広島大学本と天理図書館本の影印も収録する。研究の環境が整うとともに、一切経音義と日本古辞書との関係も着目されるに至った。

一切経音義古写本研究の画期をなしたのは、平成十八年（二〇〇六）、国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会により刊行された『玄応撰一切経音義二十五巻』（日本古写経善本叢刊第1輯）である。金剛寺本、七寺本、東京大学史料編纂所本、西方寺本、京都大学本の影印を収録し、約千四百頁の大冊である。大治本は約七百頁、広島大学と天理図書館本は約三百六十頁であるから、合計すると二千五百頁に近い分量となる。しかも、全二十五巻の完存する伝本はなく、例えば大治本は巻第三（八）の六巻、金剛寺本は巻第五・八・二十二・二十三の四巻を欠いている。

このような状況であるから、諸本本文を校合する作業は多大の労力を必要とする。加えて、一切経音義の版本は、高麗版、宋版など多数伝存しており、徐時儀博士をはじめとする中国学者に数多くの研究成果があつて、それらの参看も必要である。李乃琦博士は、日本古辞書が依拠した一切経音義がどの系統の古写本に近いのか、という観点から研究を始めたが、研究の当初から一切経音義全文データベースの構築に取り組み、短期間にこれを完成し、数多くの研究発表と論文公刊を行った。本書はそれらが集約されている。思い返せば、平成二十七年（二〇一五）八月に、北海道大学で第九屆漢文佛典語言學國際學術研討會暨第三屆佛經音義國際學術研討會が開催され、この分野の第一線の研究に接する機会があつた。李博士の研究が大きく飛躍するきっかけになったことだろう。

本書は、一切経音義古写本研究の豊かな世界を見せることに成功した。ただ今後に残された課題、新たに見出した課題は多い。一切経音義古写本の校勘本の出版も予定されている由であり、今後の研究に対する期待は大きい。

（A5判 一八六頁 二〇二二年十二月刊行 汲古書院）

青木佳倫

『注大般涅槃経』の文献学的研究

佛敎大学特別任用教員（教授） 齊藤隆信

本書の奥付上部にあるプロフィールによると、著者の青木佳倫氏は台湾高雄市長まれ、上智大学比較文化学部、及び東京大学文学部を卒業し、東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻（インド文学・インド哲学・仏敎学）修士課程を修了した後、国際仏敎学大学院大学仏敎学専攻修士課程を修了している。そして現在は、武蔵野大学非常勤講師、国際仏敎学大学院大学特任研究員を勤めている。

本書は青木氏が二〇一八年に国際仏敎学大学院大学に提出した博士論文「唐導江

県令韋諗撰『注大般涅槃經』卷二・卷十二の研究」をもとに、その後の成果を加え、全体を研究篇と資料篇に分けて出版したものである。以下にその目次を示す(節は略した)。

口絵

まえがき

凡例

【研究篇】

序論

第一章 日本に現存する『注大般涅槃經』

第二章 導江県令韋諗の活躍年代と著述

第三章 唐導江県令韋諗撰『注大般涅槃經』の成立

第四章 『注大般涅槃經』の經典本文と注

第五章 結論

【資料篇】

一、『注大般涅槃經』卷第二 翻刻

二、『注大般涅槃經』卷第八 翻刻

三、『注大般涅槃經』卷第十二 翻刻

四、『注大般涅槃經』卷第二十二 翻刻

五、現存韋諗注の集成

六、『注涅槃經』と『涅槃經』「北本」・「南本」経文異同一覧表

あとがき

主要参考文献

Abstract

本書を執筆する動機については「まえがき」にある通り、青木氏が国際仏教学大学院大学における落合俊典教授による原典講読の講義を通して、実際に日本の古写

経に触れる機会を得、しだいにその関心を高めていったことによる。

周知のごとく、中国におけるまとまった古写経と言えば、約一千年の間誰の目にもふれることなく、あたかもタイムカプセルに保存されてきた敦煌遺書として一ヶ所に封印されたものが知られている。ところが日本の場合はいくつと異なり、各地の図書館や博物館等に保存され、個人蒐集家のもとに集められており、また全国の寺院において写本・版本・活字本を問うことなく、膨大な仏典群が珍藏されていることである。それは時に戦禍を避け、時に天災を逃れるなど、大切に管理し後世に遺そうとする人たちの強い意志と営為があったということになる。その点で日本に現存する古写経は敦煌遺書を凌ぐ存在価値があるものと言える(研究価値と存在価値は異なる)。青木氏がまえがきに「日本の貴重な文化財である古写経の魅力をさらに世界に発信する必要があるとともに、その貴重な文化資源の保護・保存のために、古写経の研究は急務である」と述べている点において、評者の価値観と共通するものと理解した。断絶することなく継承されてきた日本の文化財の命運は、それぞれの時代を生きている人の手に握られているということは疑いようのない事実である。さて、青木氏は膨大な日本の古写本群の中から中国ではすでに散逸してしまった文献で、しかも唐代の居士にして地方の役人韋諗によつて撰述された『大般涅槃經』の注釈書『注大般涅槃經』に注目された。中国には記録に留める文化があるならば、日本にはそれを保存・管理する文化がある。この両国の文化的恩沢によつて韋諗の『注大般涅槃經』が現存しているわけで、本資料に注目され、これを広く紹介・研究してその成果を公表することは、まさに当該文献が青木氏の手に握られたからに他ならず、それだけでも大いに評価できることである。

それでは、以下に各章節の概要について摘記しておこう。

【研究篇】の序論では研究の目的・手法・意義が明記されている。研究の目的四点と研究手法五点に関しては青木氏の個人的な問題であるが、研究の意義(重要性)には個人を越えた普遍性がなければ意味を持たない。ここで青木氏は『注大般涅槃經』が以下の研究に対する資料提供になるとしてその重要性を喚起している。①

『涅槃經』の研究 ②唐代士大夫・居士仏教の研究 ③成都仏教研究 ④日本古代における注釈書とその展開の研究 ⑤『涅槃經』の異本研究。どれもみな興味深い指摘であり、読者はこれを意識しながら読み進めることになり、またこれとは異なる意義を見出すことで、新たな研究へと展開してゆくことができるはずである。

第一章は現存資料の書誌情報の紹介と分析、また所在不明本について解説する。本書はもと全三〇巻からなるが、巻第二・八・一〇、一二・一四・一九・二二の七巻分が現存しており、所在不明本は巻第四・一三の二巻分である。また先行研究も坂本廣博の論文がわずかに一点あるだけで、他には調査研究された形跡を確認できないとのことである。

第二章では撰者の韋諡についてその略歴と著作が紹介される。導江県（現・四川省成都の都江堰市）の県令であり、居士として仏教に関心を持っていたことは、本書の他にも『維摩經』『金剛般若經』、そしておそらくは『妙法蓮華經』にも注釈を加えていたであろうことから確認できるという。

第三章は本書の成立事情について、正倉院文書や中国の音義書等の諸資料と状況証拠をもとに、本書は七一三年から七三五年までの間に成立し（または七三三年〜七三四年の間）、入唐僧玄昉の帰国とともに舶載され、本朝にもたらされたであろうことを推定している。

第四章は本書の特徴をめぐって、士大夫による注経であること、および北本『涅槃經』に基づくことを指摘している。また本書を撰述するにあたって参考として活用した『涅槃經』に関連する注釈書類の存在を推定し、最後に韋諡独自の注記法の特徴について具体的に述べている。

次に【資料篇】では、現存する本書の写本のうち、巻第二・八・一二・二二の四巻分の翻刻と、韋諡の注記をすべて抜粋して一覧にした「現存韋諡注の集成」、そして『注涅槃經』と『涅槃經』（北本・南本）の経文異同一覧表である。

以上が本書の内容であるが、評者として以下の点を指摘しておきたい。

（五〇頁、九六頁）

天台の入唐僧円仁が唐で官僚の講義を聴講していたということを、青木氏は「ある地方長官から仏教についての講義を受けていたとの記録もあるという」（五〇頁）、「難しい仏教教理をかみ砕いて、仏教を伝える役割もあつたと思われる」（九六頁）と述べて、あたかも地方の役人でも仏教に関心があり僧侶を支えていたので、それをもって役人韋諡の注解と関連づけようとしているが、当該箇所注記によるとライシャワー著、田村完誓訳『円仁唐代中国への旅』（講談社、一九九九年）を示している。おそらくは、そこに書かれている「円仁が海州の沿岸の市でその州の地方長官に会ったときも、彼はその人物が「仏教に対する大づかみの理解があり、それについて我々僧侶に講義してくれた」と記録している」（三三五頁）によってこのように述べたのだろうが、その部分を実際の『入唐求法巡礼行記』にあたとすると、開成四年四月八日に「刺史姓顔名措、粗解仏教、向僧徒自説」（『大日本仏教全書』七二巻、九五頁中段）と記されている。つまり件の役人顔措は「粗解」していた程度であつて、その程度の知識をもって「自説」していたことを「講義」であつたと理解できるだろうか。ここはライシャワーの訳本ではなく、直接『入唐求法巡礼行記』の原文にあつた上で、自らが研究者として判断を下すべきであつたのではなからうか。（八一頁）

音注の情報源を仏教の各種音義書を並べて細やかに調査する作業は重要であるが、それと同時に仏教の音義書以外にも広げて確認する必要もあるだろう。たとえば『切韻』系韻書類や『玉篇』など、反切を示す資料は他にもあつたはずである。もちろん、そうした韻書や字書の情報と合致しないとしても、本書が居士である韋諡の著作であればこそ、調査対象を仏教の音義書以外にも広げることが無駄ではないと思われる。

（一一四頁）

筆者は、韋諡が経文にある「不復愛重、視之如草」を「不復愛重、親如芻草」に改めたことをもって、「一步踏み込んだ表現」や、「状況をさらに具体的に示した」と述べている。しかしこれは疑問である。ここはむしろ経文の通り「視（ながめる・傍観する）」のほうがより実情に相応しているといえよう。もし韋諡の修訂を採

用するならば、「不復愛重親、如芻草」と理解しなければならぬ。ところが、それでは四字一句の経文の句づくりのリズムが損なわれる。

〈一一五頁〉

筆者は「韋諡は、經典を經典としてよりも、むしろ教訓的な説話という感覚で受容していたのかもしれない」と述べているが、これを論証するために三例を示しているにすぎない（そのうち一例は右に述べたようにやや疑問が残る）。筆者の立論を証明するならば、更に豊富な用例を示す必要があるのではなからうか。

〈二二七頁〉

韋諡注の特徴として、引用文献の非開示を指摘している。しかしながら、中国の仏教文献で出典を明記せずに引用したり、経文を作者の主観によって改変したりすることは珍しいことではない。現代の研究倫理観とは異なり、彼らはそれを不正（剽窃・改竄）とは認識していなかったはずである。よって、これをもって本書の特徴であるとは言えないだろう。ごく普遍的な現象であったに違いない。

〈資料篇〉

影印が掲載されていないのは単に出版にかかわる費用の問題が関与しているのであらうが、筆者が搜索した写本を除いて他に現存が確認できない天下の孤本であればこそ、今後はデジタルアーカイブの構築等によって誰もがアクセスし利用可能な環境を整えることを期待したいところである。

〈その他〉

もと三〇巻から成る本書は中国で散逸してしまい、日本だけに七卷分（所在不明本を含めると九卷分）が現存している。まことに幸運なことではあるが、韋諡の注記が後の仏典に引用され活用された形跡が見当たらないことや、現存する巻に重複がない（要するに盛んに書写されたのではなかった）ことも考慮するとき、後世にどれほどの影響力があったのか疑問とせざるを得ない。その場合、筆者が研究意義としてあげた五点のうち、③成都仏教研究にのつての新資料の提供、④日本古代における注釈書とその展開の研究への一資料の提供については、再考する必要に迫られるかもしれないが、それは今後の研究の進展次第であらう。

また、資料篇二八〇頁に対して研究篇は一六〇頁ほどである。ページの分量の多寡が必ずしもその研究の評価を左右するわけではないが、読者はやや物足りなさを感じるかもしれない。しかし、このたびの出版目的はタイトルにある通り、「文献学的研究」であり、また「基礎的な研究」（七頁）であることに起因するからである。この文献学的研究・基礎的研究については本書で概ね達成されており、その点において研究篇のページ分量は満たされていると言えるだろう。

そこで、今後は未調査の巻第四、一〇、一三、一四、一九も順次調査できるように環境が整備されることが期待されるし、加えて思想的な方面にも手を広げるとともに、筆者が自ら示した五点の研究意義（八頁）を順次解明し、さらに新たな意義を見いだすことで、より精緻で立体的な研究成果の公開につながることを期待したいところである。

貴重な文化財としてただ保護・保管するだけでなく、このたびの「文献学的研究」、「基礎的な研究」を基盤として、さらに進んで筆者が目指している「総合的な研究」（二五九頁）、「多角的な研究」（四四八頁）が果遂されるならば、それこそ撰者韋諡の功勳を現代に顕彰することになり、さらには八世紀から現在にいたるまで本書を大切に伝承してきた者たちへの報恩謝徳になるものと考ええる。

以上であるが、書評と言うには心もとない内容となってしまうことをお許しいただきたい。「言うは易く行は難し」であるように、限られた現存資料と、数少ない先行研究を前に、今後の進展が多難であることは予想されるが、その一方で前人未踏の領域を開拓しているという高揚感も得られるに違いない。今後も筆者の継続的で不退転の研究に期待したいと思う。

（A5判 四七二頁 二〇二二年二月刊行 法蔵館）

福州版一切経調査研究会編

『宋版一切経（福州版）調査提要—本源寺蔵の調査を通して—』

広島大学大学院教授 佐々木 勇

本書は、福州版一切経調査研究会（牧野和夫・高橋悠介・中村一紀・野沢佳美・上杉智英・落合俊典・前島信也・南宏信・矢口郁子・渡辺信和）本書の「執筆者」四名を先に、他は氏名の五十音順に挙げた）による「刻工名・印造記などを中心とした一切経調査の手引書」（はじめに）である。二〇〇〇年から二〇一九年の二十一回に亘る調査の全容が知られると同時に、今後の宋版一切経調査のための要領を提示した「提要」でもある。

本書の目次大枠は、次のとおりである。詳しくは、勉強出版のホームページ等を御覧頂きたい。

宋版一切経（福州版）調査提要

はじめに 大蔵経調査の必要性

一 印刷漢文大蔵経の簡紹・説明と福州版大蔵経の問題点

二 福州版大蔵経―『東禪寺版（一切経）』『開元寺版（一切経）』

三 調査―その現場と調査など

四 書物としての宋版一切経―書物各部の名称・版式としての名称など

五 応用篇

論考

宋版大蔵経と女性刻工 野沢佳美

書陵部蔵福州版一切経の本文欠落巻について 中村一紀

宋版一切経補刻葉に見える「下州千葉寺了行」の周辺 牧野和夫

附録

題記一覧―本源寺蔵を軸に―

主要参考文献一覧（福州版一切経関連に限る）

用語索引

本書の中心は、書名ともなる、前半の「宋版一切経（福州版）調査提要」であり、

「刻工名」「印造記」「施財刊語」「印面」「両面刷」「帖冊の厚さ」という「従来の宋刊大蔵経の調査事項においては軽視、乃至看過されたきた項目」（6頁）を調査すること、版本調査の基本である刊行の時期・印刷の時期・補修の時期の識別（刊・印・修）を明確にした。

そのため、前半「宋版一切経（福州版）調査提要」の中でもっとも多くの頁を割いて論述されているのは、「四 書物としての宋版一切経」である。宋版一切経を書物として正確に捉えるために、ふさわしい調書とはいかなるものかを、宋版一切経原本と対峙する中で探ってきたことが述べられている。説明・解説のために掲げられた豊富なカラー写真は、それ自身が重要な資料的価値を持つ。

度重なる調査の結果、「⑥ 完存・欠」などの現存状態の調書における記入位置が変更された。これらの「項目欄の移動」は、「調査の都度による変更も可能で、調査記入の速やかな「流れ」に従って臨機応変に対応すべきであろう。」（52頁）と注意喚起される。

また、「刊行当時の題記が駆逐され、施財刊語にとって変わられる「姿」を目の当たりにするのである。」（89頁）という体験も、十全に準備された調査カードと、それに基づきつつ、対象資料の実態に合わせて調査項目を変更する柔軟な姿勢によって得られたものである。

かつての福州版一切経の調査および目録作りで、もっとも時間をかけたのは、「⑩題記」の項目（本書76～92頁）であった。それを、記号化して調書に記す方法が紹介されている。77頁には、『方廣大莊嚴經』巻第八（088）の巻首写真が掲げられ、東禪寺版C系①に分類される題記が翻刻されている。その翻刻一行目下の「□真」と「謹募」との間が空白になっているのは、写真で確認できる「等」を落としたものであろう。また、77頁の翻刻では、「今上皇帝」と「大皇太后」との間に、原本に存する空格を空白とする。しかし、附録の東禪寺版C系①の題記には、この空格が無い。「大皇太后」前の空格は、「大皇太后」への敬意を示したものである。ただし、「大皇太后」前に常に空格が存するわけではなく、その空格の幅も様々である。これを、分担調査の翻刻で区別することは難しい。そのため、醍醐寺蔵本の

目録では、「これらを正確に翻字することは困難を伴い、調査者の間での不統一が生ずる惧れがある。」「そこで、この目録では、止むなく、空格を設けず詰めて翻字することにした。」(小林芳規「醍醐寺藏宋版一切経解題(一)」)「醍醐寺藏宋版一切経目録 第一冊」(二〇一五年、汲古書院)七〇・七一頁、と記している。本源寺藏福州版一切経調査の主目的ではないものの、この空格をいかに処理したのか、皇帝の諱の欠画(欠筆)、謙讓の意を表して小字とされた僧名の存在などについても、注記しておいて頂けると、将来の研究にさらに有意義であったもの、と思われる。

東禅寺版補刻葉版心干支の年号一覽(114頁)は、今後の東禅寺版研究に活用されねばならない。また、122頁の印造記一覽に基づけば、東禅寺版か開元寺版かが不明な福州版の版種認定が可能となる。ただし、後に詳しく述べられる「混合帖」の存在に注意を要する。

なお、127頁に、「開元寺版には、例外として尾題以下に音義を付すこともある。」として、『法苑珠林』巻第二十の写真と調書が掲げられる。「開元寺版には、」とするこの記述は、東禅寺版に帖末の音義が無いかのような誤解を与えかねない。東禅寺版の帖末音義については、山本秀人「醍醐寺藏宋版一切経解題(二) 音義」(『醍醐寺藏宋版一切経目録 第一冊』(二〇一五年、汲古書院)を、御覧頂きたい。

「五 応用篇」では、まず、「五面一紙混入のこと」が採り上げられている。紙数の多い福州版の中間に五面の一紙が挟まれることについては、本書にも引用してくださった佐々木 勇「宋版一切経東禅寺版に五面の一紙が挿入された理由」(二〇一四年)の5頁下段で述べた(本書での引用が正確ではないので、拙稿を直接御覧頂きたい)。本書が指摘するとおり、福州版の印刷・製本には、経函への収納の観点を外せない。拙稿「宋版一切経思溪版の版式転換…一紙六面から一紙五面へ」(二〇一五年)でも、「一帙十帖と音釋帖を積み上げた時、左右両辺の厚さの差は、放置できないものとなったのであろう。」とのみ記し、経函の蓋が閉まらない事態が生じたであろうことを明記しなかったのは、不十分であった。

「C 混合帖など」では、「一帖の中に、東禅寺版と開元寺版など別種の版に基づいて印刷された紙が継がれている」(148頁)帖である混合帖について、画像とともに

に、具体例が挙げられている。この混合帖では、東禅寺版と開元寺版の刻工を区別すべきであることが説かれている。今後の福州版一切経調査で、必ず参照されるべき項目である。

続く「論考」では、野沢・中村・牧野各氏の既発表論文から各一編が掲載される。宋版一切経を中心とする大藏経に関する論考多数を発表なさっている各氏が、それらの中から、本書のために著者自ら選んだ一編である。いずれも、宋版一切経の雕刻に携わった人々の動きが見える論考である。

野沢佳美「宋版大藏経と女性刻工」(二〇一三年初出)は、磧砂藏本を正確に捉えることで、女性刻工が多いのは「北宋後半から南宋初期」の思溪藏刊刻においてであり、その後は減少することが明らかにされた。この事実は、南宋中期以降に「兼業」する刻工が減少したことを反映するのでは無いか、と推測されている。

中村一紀「書陵部藏福州版一切経の本文欠落卷について」(二〇一八年初出)は、書陵部藏福州版一切経に「作為的」な本文欠落を持つ巻が存することを、画像を伴う多くの具体例によって、指摘した。「本文欠落卷」は、「三〇紙前後」の厚い帖に偏る。しかし、三十紙前後の厚い帖の全体から見れば、「本文欠落卷」は僅かであり、また、本稿発表後の調査で、全十七紙であるべき「阿毘曇毘婆沙論」巻第九が十一紙になっている例などが見出された(附記)。そのため、「厚さ軽減」以外の本文欠落要因も考える必要が明確となった。その一つとして、「印刷工房の何らかの事情」を想定している。

牧野和夫「宋版一切経補刻業に見える「下州千葉寺了行」の周辺」(二〇一一年初出)は、「刊・印・修」を区別して、宋版一切経を整理し、考察を加えた初期の論考である。多岐に亘る事項が記述されているため、「追記」(附記)を含め、原文を熟読頂きたい。「結び」には、調査の結果に基づく、王公祠堂本刊行(二一六二年)から慶政没(二二六八)までの宋版一切経に関する「略年表」が掲げられている。

目次のとおり、「附録」として、「題記一覽―本源寺蔵を軸に―」と「主要参考文献一覽(福州版一切経関連に限る)」を附す。

「題記一覽」は、本源寺蔵本調査時の調査記入用に整理されたものである。小島

惠昭・織田顕信・藤谷一海『本源寺藏宋版一切経調査報告』（同朋学園仏教文化研究所紀要）創刊号、一九七九年三月）が東禪寺版A～M・開元寺版N～Rと整理した題記に、東禪寺版のN～Pが追記された。「同じ系統の中での異同箇所を太字で示す工夫が加えられている。ただし、東禪寺版のF系⑤以降と開元寺版のQ系には太字が無いため、それぞれの同系内での違いが一目ではわかりにくい。たとえば、G系②の1と2、Q系②と④との相違点は、「雕」と「彫」との異なりなのであろうか（G系②の2の「二月年」は「二年」の誤りであろう）。

「用語索引」は、従来、統一されていたとは言えない宋版一切経研究の用語を定めようとするものでもある。本書の用語が広く普及することを願う。

「あとがき」には、まず、調査にご援助くださった方々への感謝の気持ちが述べられ、故人追悼の志が記される。残念なことに、人の命は、文献の生命より短い。現在、本源寺藏宋版一切経の全巻は、「中性紙の薄様紙で梱包」され、「平成の年に新造された経蔵内の桐製の箱に一帖ごと封筒に入れ」て保管されている（285頁）。古文獻を永く伝えようとする福州版一切経調査研究会の皆様の心構えと、その方法を学ぶべきである。

「延べ百三十余名の参加を得」て「遠からず完成する」『目録・刻工名・印造者名篇』も、宋版一切経研究に多大な学恩をもたらすであろう。目録の刊行を、鶴首して待ちたい。

（A5判 三〇四頁 二〇二二年三月刊 勉誠出版）